
キヨラカ涙

コモン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キヨラカ涙

【Nコード】

N5644N

【作者名】

コモン

【あらすじ】

一目惚れした相手と初デート。高橋加賀徒の胸は高鳴り、緊張しっぱなし。しかしそんな所に、怪物赤食いが現れる。しかし彼は父より受け取った謎のサングラスによって、白い騎士に姿を変えて戦う事ができた。なぜなら彼は……

（前書き）

この作品は、間違っても不純異性交遊を推奨するものではありません。

「これなあに？」

当時幼かった彼は、父に尋ねた。彼が両手で持てる程の大きさの木の箱。父の手だと、片手に収まる程度だ。

「宝箱だ。お前が二十歳まで、良い子にしてたら開けなさい」

「うん、分かった！」

そう答えて彼は小箱を受け取り、机の中にしまった。

彼はそれをとて大事にしていたが、開ける事だけは絶対にしなかった。言いつけを守るのも、良い子の条件だったからだ。

その時は、これが後に彼を悩ませる厄介なものになるとは、思ってもみなかった

高橋加賀徒はその日、いつもより緊張していた。かつて学芸会で芝居に出た時よりも、嫌々生徒会選挙に参加させられた時よりも、その度合いは大きかった。これから先も、今ほど体が強張る事はないとすら思える。

ジャケットを羽織り、自分の出で立ちを鏡で睨みつけるように見ながらコーディネートをチェックする。

「……問題、ない、よな？」

いささか自信はなかったが、今より見栄えのいい格好は手持ちの服では出来るとも思えない。できる限りのおしゃれはしたつもりだ。

「よし、行くか」

大げさに言っただけで自分を奮い立たせ、彼は自分の部屋を出た。時計を見れば午前八時。待ち合わせの時間は十時で、落ちあう場所まで行くのに三十分はかかる。良い印象を持って貰うためには、先に行っ

て相手を待っておきたいところだ。

加賀徒は家を飛び出し、駅へと急いだ。大学までの通学路に沿って走り、駅に着いたらいつもと違う行き先の切符を買う。電車を待

ちながら荒れた息を整え、やってきた電車に入る。十分も経たない内に電車は目当ての駅に着いた。いの一番に飛び降り、ホームにつながる階段を上って改札を出る。

駅のすぐ傍に、待ち合わせと決めていた喫茶店はあった。駅のすぐ前にある大通りを横切り、店の前で足を止める。

先に店に入って席を取るべきか、この場で相手が来るのを待つか、判断に悩む。何しろ初めての事なので、段取りに慣れていないのだ。店のガラス窓を覗きこんでみるが、会う約束をしている人物の姿はない。店内にいる少数の客は、その全てが席を立とうとしている所だった。

「来るかな、あの人……」

心細い気分になり、彼は呟いた。自分の立つ場所を見回し道行く人を確認するが、相手は見つからない。駅前にある時計を見上げてみると、時刻は九時に差し掛かるうとしていた。

一時間前は早過ぎたか。そう思ったその時、背後から肩をつつかれたのに気付いた。何だろうかと、後ろを振り返る。

心臓が跳ね上がったのが分かった。

「お待たせ、高橋君」

声をかけてきたのは、待ち合わせの相手だった。彼女の姿を見て、加賀徒は喜び半分緊張半分といった心境になった。舞い上がった気分とは裏腹に、舌が強張ってうまく喋れなくなってしまう。

「いいい、今来た所」

「うん、あたしも。何か、びっくりしちゃった」

はにかむ彼女に、加賀徒は黙って何度も首を縦に振った。うまくものを言う事ができず、彼は黙って手で店の前を指し示した。彼女はそれに頷き、喫茶店に足を伸ばした。彼もそれを追う。

この後どんな話を話そうか。

加賀徒の頭は上手く回らず、熱を発するばかりだった。

島田仁美と知り合ったのは、三日前になる。大学から帰りの電車に乗った時、面識の無かった二人はたまたま並んで立っていた。

電車が揺れて倒れそうになった彼女を彼が支えたのがきつかけだった。その瞬間、加賀徒にとって彼女はすぐ傍に立つ有象無象の他人ではなくなった。

一目惚れだった。訳も分からず勝手に名乗ってしまい、メールアドレスの交換まで迫ってしまった。言った後で自分がどれだけ早まった事をしたかに気付き、全身からさつと血の気が引いた。車内で押し殺したような笑い声が聞こえ、顔から火が出るようだった。

ところが彼女は嫌な顔一つせず、彼の申し出を快諾した。彼に恥をかかせないためか、それとも彼に興味があったからか。それは彼には分からないが、前向きな返事が貰えて彼は舞い上がった。

そして帰宅後連絡を取り合い、会う約束を取り付けたのだった。それが今日であり、加賀徒にとっては初めてのデートだった。

全てが上手く行きすぎて、まるで夢のようだった。今も彼女を見るだけで、顔が熱くなってしまう。

「どうしたの？」

対面に座る仁美が、ぼうつとしていた加賀徒に声をかける。そこでようやく、彼は意識を取り戻した。

「ああ、すいません。何か、その……」

気の利いた話を話そうとするが、舌も頭も回らない。結局、よく分からない呟きだけが喉から漏れるだけだった。その様子を見て、仁美が口を開く。

「高橋君は、今学生？」

「え、あ、はは、はい。大学、です」

「そうなんだ。若いなあ」

「え、いやいや、島田さんだって、お若いですよ」

年上である事は聞いていたので、加賀徒は必死でフォローした。緊張から加賀徒は喉の奥で声がつつかえてしまうが、仁美は気を害しなかった。

「あらやだ、もう。お上手ね」

笑顔を崩さず、彼女は少しだけ顔を赤らめた。その表情が加賀徒

の好みであり、彼はますます浮ついた気分になる。もつと笑つて欲しくて、「冗談を言おうと彼は必死になった。

「そそ、その、ですね。あの、島田さん、は、ご趣味は……?」

「趣味? そうだね、読書とか? あ、最近料理を覚えようとしてるの。ちよつと、思う所があつて」

「料理ですか。ああ、いいなあ。どんなの作るんですか?」

会話の切っ掛けを掴んだとばかりに、加賀徒は食いついてみせた。仁美は照れくさそうにしながら答える。

「始めたばかりで恥ずかしいんだけどね。大したもの作れないの」

「そんな事ないですよ。俺実家住まいだから全然しませんもん。すごいと思いますよ」

「そう? ありがとう」

そこまで話しが進んだところで、ウェ이터がコーヒーを二つ持ってきた。二人は会話を切り、ウェ이터が離れるのを待つ。加賀徒は運ばれたコーヒーに早速口をつけ、ちびりちびりと飲み始めた。一度話しが切れてしまったので、巻き返す機会を探ろうとしていたのだった。

また二人になった所で、仁美が口を開いた。

「そういえば高橋君は、好きな子いるの?」

加賀徒は飲みかけていたコーヒーを吹き出しかけた。気管に入りかけ、必死で咳を仁美にかけないように俯く。何度か咳き込んだ後、落ち着いた頃に彼は顔を上げた。

「何を言うんですか、いきなり!」

「あら、驚いた? ごめんね。でも、気になっちゃって……」

「俺なんかもてませんよ? 女の友達もいないのに」

泣き言を言つて、加賀徒は窓の外を見た。他の話題を探そうとしての、さほど意味の無い行動だった。

だが、そこで彼は気付いた。外の様子がおかしい。彼の見える方向から、人が雪崩のように突き進んで窓の前を通り過ぎていく。面子も様々で統一感がない。その場にいる人々が全て走っているよ

うだ。

目を凝らして散っていく人混みの向こう側を見透かしてみる。

加賀徒は自分の目を疑った。

人の頭より高い位置に、人より大きな口があった。真つ赤な裂け目に沿って鋭い牙が立ち並び、粘ついた糸を引いていた。

さらに信じられない事に、ワ二のような顎の付け根から、六本の細く長い蜘蛛のような足が生えていた。その足で顎だけの身体を支えており、虫そのものの足の動かし方でこちらに近づいてきていた。「あ、赤食い！？何でこんな所に！？」

思わず叫び、加賀徒は席を立った。彼の様子に驚き、仁美が目を丸くした。

「ど、どうしたの？外が騒がしいみたいだけど……」

仁美も外の様子に気付いたのか、加賀徒が赤食いと呼んだ怪物のいる方向を見ようとす。加賀徒は慌てて両手を突き出して見せ、彼女を制した。

「ああ、見ちゃ駄目です！大丈夫、ここでじっとして！」

加賀徒は喫茶店を飛び出した。人混みが通り過ぎ、開けた空間が現れる。そして、ゆっくりと近づいてくる赤食い。飢えて狂った獣のような声を上げ、怪物は目の無い顔を彼に向ける。

加賀徒は動じず、ポケットに手をつ突っ込んであるものを取り出した。

二十歳になったばかりの頃、彼は自分の部屋の前に来た父に、こう尋ねられた。

「宝箱は持つてるか？」

「ん？うん、ちよつと待って」

彼は机の引き出しから、宝箱と言って渡された箱を取り出した。十数年ぶりに見るその小さな木の箱は、思い出の中のものよりも小さく、くたびれたものに見えた。

実を言つと、彼はこの箱の事を大分前に忘れていた。中身が見え

ない事に対する興奮はあったが、中身を見られないという不満が募ったからだ。二十歳までというのも、当時小学生だった彼には長すぎる猶予だった。こうして二十歳になって、箱を開けられる日があるとは思っていなかったのだ。

まじまじと箱を見て、二十歳の加賀徒はその箱を父に見せる。

「よく持ってたな。昭や亮は、どこにしまったか忘れてたつてのに」
「まあ、物持ちはいい方だから」

他人事のように言って、加賀徒は首をひねった。ちなみに、昭と亮というのは共に加賀徒の兄である。

「で、これがどうかしたの？」

「お前ももう二十歳だ。開けていいぞ」

「ん、分かった」

蓋に指をかけて力を入れると、すんなり箱は開いた。

十数年経って初めて見る箱の中身は、彼の興味を引くものではなかった。

「……何、これ？」

彼はそれを手に取り、表と裏とをまじまじと見た。

「その使い方は今から教える。……ところで、だ」

途端に父は、神妙な顔になって加賀徒に詰め寄った。顔を近づけられ、加賀徒はうろたえる。父とは言え、中年の男に迫られたらどんな男も嫌だろう。

「な、何、父さん？」

「これだけはどうしても聞いておきたいんだ。いいか？」

「い、いいけど、何？」

「……お前、彼女いる？」

自分の顔が歪むのが分かった。生まれてこの方、恋人などいた試しがない。

「まあ、うん。いないね」

「そうか。おお、そうか！」

父が本気で喜んでいるのが分かった。後の「そうか」は、震えた

声になっていた。

「いやあ、よかった！お前は絶対もてないって、父さん信じてた！」
「なんて嫌な信頼だ」

思ったままを率直に述べ、加賀徒は嬉しそうな父を睨んだ。父は顔を離し、箱の中身を取り出す。

「なら安心だ。これをつけてみなさい」

そう言つて父が差し出したものは、宝箱の中身だ。

大きさは手のひらに乗る程で、片側から縦に開くことが出来る作り。折りたたみ式の携帯電話を彷彿とさせるが、その形はいびつだ。航空機の片翼を思わせる、左右非対称な五角形。父がそれを開くと、サングラスによく似た形に変わった。

「お父さんにはもう使えないから、お前が付けなさい」

そう言われて、加賀徒は嫌な顔をした。サングラスにしてはごてごてしており、彼の趣味では無い。

「ええー。兄貴等にやってよ」

「駄目だよあいつ等、彼女いるもん」

何が悪いのだろうか。加賀徒の頭を疑問がよぎるが、言われるままに父からそれを受け取り、開いたままにして両目に当てた。

変化が、始まった。

サングラスのようなものの周りからいくつもの細かい鉄板が飛び出した。どこに入っていたのかと驚くような量のそれは、ジャララと音を立てて列を伸ばし、他のたくさん列と併走しながら加賀徒の周辺を巡り、彼の全身を覆った。余す事無く彼を包むと、白いその鉄板の発生がぴたりと止む。

次に、隈なく敷き詰められた鉄板は、段差を無くし境目を消し、一人を内包したその全体像を引き締まったものへと変えていった。そしてその概形を、彼本人のものとはまた違った別のものに変化させていく。

出来上がったのは、騎士を思わせる姿だった。全身に纏った金属の

鎧、馬の顔を思わせる意匠のヘルム。

きん、と澄んだ金属の音が上がる。それと同時に加賀徒の額、ちょうど彼がつけたサングラスのようなものの中心のすぐ上に位置する部分から、前に向かって長い角が一本生えた。滑るように現れたそれは金色で、よく見ると渦のような溝が刻まれている。頭を覆う馬の顔のようなヘルムと合わさって、物語の神獣であるユニコーンを思わせた。

赤食いが足を踏みしめ、驚いたかのように声を上げた。彼を敵と認め、長い足を持ち上げて立ち位置を変えた。本体とも言える口の部分を沈め、歯を食いしばって唸り声を上げる。

姿を変えた加賀徒は、すぐ傍から自分を見下ろす赤食いを見上げた。彼にとって、この怪物の相手は初めてではない。

そして、この怪物が姿を現す理由にも勘付いた。背後を、仁美しかない喫茶店の店内を一瞥する。そのサングラスのようなものがあるものを察知し、対象を緑色に染めた。

ああ、そうか。

失望と諦めが彼の中に生まれたが、思考を切り替え、赤食いと対峙する。ワニのような口の奥から、背筋を震わせるような低い吼え声が響いた。

「出てくんな、こんな日に！」

白い騎士は怒鳴り、腰の後ろに現れていた剣を引き抜いた。

対して怪物、赤食いの武器は牙と、長い足の先に一本ずつある爪だ。合わせて六本ある大きな虫の足が、複数ある間接によって不思議な軌道を描いて騎士に迫った。

頭上から振り下ろされる足をかいくぐり、彼は前へと走る。新たに迫る別の足に、騎士は剣をかざして切先を突き立てた。足の勢いは止まらず騎士は押されてしまうが、その勢いで剣は深く赤食いの足に刀身を沈めた。赤食いの爪の先は、鎧に阻まれて騎士自身を傷つけるには至らない。

赤食いは野太い悲鳴を上げ、敵を踏み潰そうと残った足を振り上げ

た。騎士は剣を引き抜き、後ろへ大きく跳ぶ。姿を変えた彼の脚力は以前とは大違いだ。悠々と自分の背丈の高さを跳び越え、背後のビルの二階の手すりに足を乗せる。それも一瞬の事で、横風ぎに振るわれた足を避けるために彼は更に高く、前へと跳んだ。降ろすための足しかない赤食いの、その足の届かない頭上へと躍り出る。剣を振り上げ、大きく開かれた顎へと迫る。

噛まれたらどうしようだの、着地をどうするだの、後の事は考えない。間合いに入るまでの滞空時間は、ただ無心で相手を睨んでいた。距離を目ではなく肌で計り、剣を持つ手に力を込める。

赤食いが逃げようと身を沈めるより早く、彼は距離を詰められた。息を止め、赤食いの鼻先に剣を上から叩きつけるように振り下ろした。

肉に当たる、柔くも確かな手ごたえ。空中で剣に体重を乗せ、力を込める。顔につくものを振り払う手を持たない赤食いが吼えて鼻先を乱暴に振る。しかしその時すでに剣は肉を裂き、肉の下にある骨をも砕いていた。

それでも騎士は剣を引き抜かず、奥へ奥へと刃を押し進める。罪悪感は、ない。赤食いの生態を考えれば、手を緩める事などありえなかった。剣を持つ手が赤食いの喉の奥まで達し、上顎は完全に両断された。

剣は止まらなかった。白い甲冑を開けた喉の奥に更に潜らせ、赤食いの頭頂部にあたる部分まで剣を振り切る。致命傷を負った怪物は痛みに足をよじらせ、悲鳴を上げるように開いた口を上に向けた。それきり力を無くしたように赤食いは動きを止め、足をだらしなく曲げて胴体を地面に落とした。激突する前に、騎士が切り開いた赤食いの頭から脱出し、着地する。立ち上がる白い騎士の後ろで、六本足の怪物は絶命し動かなくなった。

騎士は一度剣を振って刃の血を落とすと、剣を腰の後ろにある鞘に戻した。

そして目の部分に指をかけ、右の目じりの部分に位置する解除ス

イッチを押した。騎士の全身を覆っていた白い甲冑が彼から剥がれ、砂のように崩れて消える。

元の姿に戻った加賀徒は、はあ、とため息をついた。

「え、え？何これ、どういう事！？」

白い鎧に覆われた自分の両手を見て、加賀徒は驚きうろたえるばかりだった。落ち着き払った父が、あらかじめ部屋の前に持って来ていたらしい姿見の鏡を廊下から引つ張り出す。それに映し出された自分の全身を見て、加賀徒は裏返った声を上げた。

「うえああ！？え、え……えええ！？」

鏡の中の騎士が自分自身だと分かり、混乱に拍車がかかる。加賀徒本人にしてみればおかしなサングラスをかけただけで、まさかこうなるとは思いもしなかったのだ。

戸惑う彼に、父が話す。

「一角戦騎とでも言おうか」

「名前はいいい別に！これ何！？」

サングラスのある位置に手を這わせ、加賀徒は父に怒鳴った。取り付けたサングラスは顔を覆う仮面の奥まった位置にあるため、引き剥がそうとする事もできない。うろたえる息子を、父は誇らしげな目で見ていた。

「昔お父さんが使ったものだ。お父さんはもう使えないから、今からお前がそれを使え」

「嫌だよこんなの！兄貴達にやってよ！」

「だーから無理だって。彼女いるもん」

「それが何と関係あるのさ！」

「それだよ、それ」

父は加賀徒の顔の辺り、目に貼り付いたサングラスを指差した。

「見たら何となく分かると思うが、そいつのモチーフはユニコーンだ」

「まあ、それは分かるけどさ。それが何？」

「ユニコーンの特徴を言ってみる」

加賀徒は眉をひそめて唸った。昔やっていたいくつかのテレビゲームでしか、ユニコーンについては知らない。角の付け根の辺り、装甲越しに指を当てて彼は記憶を探った。

「えーっと、確か、処女の前にしか出て来ないとか……」

「そーう、それだ。実はそれ、女でもなれるんだ」

「え、そうなの？……ん？」

加賀徒の中で、父の言葉とユニコーンについての知識が結びつき始める。

『駄目だよあいつ等、彼女いるもん』

『お父さんはもう使えない』

『処女の前にしか出て来ない』

全ての要素が結びつき、一つの結論に行き着く。

「おいこれまさか」

「その通りだ」

父は堪えていた笑いを鼻から漏らし、耐え切れず表情を崩した。

「変身するのに必要なのは純潔だ。お前の場合、プッフ……フッフ、童貞だな」

後ろから軽いもので殴られたような気分だった。頭が真っ白になり、思考が止まる。

「昭や亮に聞いたらあいつ等もう切っててさ、どうしようって思ってたんだよな。お父さんが変身できたのも結婚前だしさ、万事休すって感じだったんだ。で、お前しかいなかった訳だ」

にこやかに父は姿を変えた加賀徒の肩を叩いた。刺激を与えられたせいか、加賀徒の思考がゆっくりと回り出す。感情よりも先に、理論が頭の中を巡る。

「言っとくけど、誰かに渡そうなんて思うなよ。ウチに代々伝わる、聖なる武具だからな。ご先祖様も、これで赤食いずっと戦ったんだぞ」

「……あ、敵がいるんだ。そうなんだ」

乾いた声で加賀徒は父に尋ねた。赤食いというのが何なのかは知らないが、非常識な武装で相手をする、非常識な存在である事だけは想像が付いた。

「ああ、赤食いつつーんだけだな。ぶっちゃけワニの口のついたでかい蜘蛛みたいなモンだ。お前はそいつをバツバツと倒せばいい」

「放っておいていいんちゃう？」

投げやりに尋ねる。彼のどこかで、意識していない部分が持っていた自尊心が崩れていたせいで、何を言われてもどうでもいい気分だった。

しかし、父は途端に真面目な顔になった。

「それは駄目だ。絶対に」

骸になった赤食いが瞬く間に肉を腐敗させ、骨を風化させる。十秒も経たない内に怪物の肉体は崩れ落ち、存在した痕跡も残さないかのように消えてなくなった。遺体を消滅させるのは、どの赤食いも変わらない。

喫茶店の扉が開き、仁美が顔を出した。店の奥の席ですっと加賀徒の言い付けを守っていたからか、怪物の存在に気付いていなかったようだった。

「何かあったの？いきなり静かになったけど」

「ああいや、何でもないですよ。島田さん」

加賀徒は仁美に駆け寄ると、両手を見せるようにして不安がる彼女をなだめた。

「……今日はもう、帰りましょう」

「え？で、でも……」

「……言いたい事は分かります。今日はありがとうございました」
朝にあった浮ついた気持ちは、もう無かった。加賀徒は静かに彼女に声をかける。

事実は彼の望むものではなかった。だがしかし、彼女に怒る道理

もなかった。

「え？」

「俺に恥をかかせないように、今日だけは会ってくれたんですね」

「え、ええっと、それって……気付いてたの？」

「はい。ちよつと前に。こんな事を言うのも失礼かもしれませんが……」

加賀徒は視線を下げ、目の前にいる仁美の顔から腹に目を移した。見た目には締まった細い腹だったが、騎士だった時の目は確かにそれを認識していた。

「お腹の赤ちゃんを、大事にしてあげてください」

申し訳なさそうな彼女に、加賀徒は労わるようにそう言った。

武装の解き方を教えられた後、加賀徒は元の姿に戻る事ができた。安心した彼は、自分の椅子に大きく腰を沈めた。彼が落ち着きを取り戻したのを見計らって、父は再び口を開いた。

「赤食いがどこから来たか、それはお父さんも知らん。だが、奴等は絶対に放っておいてはいかんのだ」

真面目な顔になって言う父に、加賀徒は椅子を置き直して彼と向き合った。先ほどもまでのような息子をからかっていた雰囲気は、今はない。彼も聞く姿勢を作って父の言葉に耳を傾けた。

「人食いと呼んでもいいが、奴等が好んで食うものがある。分かるか？」

「……いや、全然」

先ほど存在を教えられたものについて質問されても、彼にはそうとしか答えられなかった。材料が少なすぎるので、考えようがない。

「じゃあ、ヒントだ。赤食いの赤って、何だ？」

「ん？赤食い……人食い……」

すぐに分かった。半ば信じられず、加賀徒は顔を上げて父を見る。息子の固い表情に、父は首を縦に振った。

「そうだ。奴等の鉱物は……赤ん坊だ」

加賀徒の半開きの口が閉じられ、歯が軋んだ。

「……性質の悪い冗談だぞ、親父」

「俺もそう思う。だが、本当なんだ」

加賀徒は俯き、両手で頭を抱えた。片手を離し、机の上に置いていたあのサングラスを手取る。

「じゃあ、俺はこれでその赤食いを始末しないといけないのか」

「そういう事だ」

騎士に変身してから出来る事はすでに聞かされていた。身体能力の強化に加えて戦うための装備の充実、そして防衛対象である赤ん坊の識別。胎児の反応も拾える目の機能のおかげで、赤食いの行動を読む事もできる。

「奴等の思考は虫と同じだ。見つけ次第、遠慮なくやっていい。俺もそうしてきた」

「……うん、分かった」

逆らう気はさほどなかった。面倒くさいという気分は少なからずあったが、非人道的な敵の生態を聞かされて他人事ですませられるほど彼は薄情ではなかった。

「奴等は隠れて動く上に遺体が残らないから、多くの人の目には触れないんだ。だから警察とか軍隊とか、そういう組織は存在を信じないし当然足並みも鈍くなる」

「だから単独で動けるようにこれが必要になる、と」

加賀徒は折りたたんだサングラスを持ち、父に見せた。

「そういう事だ。だから、頼む」

父の言葉に、加賀徒は頷いた。力を持って、おぞましい怪物と戦ってくれ。そんな頼みを断るわけにはいかなかった。他ならぬ、自分にしかできない事だからだ。

「童貞でいてくれ！」

続いて出てきた父の言葉に、加賀徒は改めて現実を思い知らされた。

彼の心境を知ってか知らずか、畳み掛けるように父は言う。

「純潔を保っていてくれ。そうでないと、もう変身できないから」

「え、何それ。すっごい理不尽」

「そういうシステムなんだよ。仕組みは全く分からないけど」

在りし日の父の姿を想像し、彼は情けなくなってきた。母と出会い、ある日を境に変身できなくなつてうろたえる姿が、いつかの自分と重なるかもしれないのだ。

それに、好きで今まで清い身でいた訳では無い。きっかけさえあれば、彼女ができるかもしれないのだ。

その日のために、加賀徒は父にこう尋ねた。

「えーと、キスは？」

「アウト。口と口とは完全アウトだ」

顔が引きつるのが、自分でも分かった。息子の様子に気づき、父は説明を加えた。

「でも、心配するな。同性でなら問題ない」

「別の意味で心配だよ。それを聞いて安心すると思ったの？」

泣きたくなつてきた。身を折り、頭を垂れてうなだれる。ついに彼は黙りこくつてしまい、何も言おうとしなくなった。

そんな息子に、父は肩に手を置いてやってこう諭した。

「落ち込むな。童貞は恥ずかしい事じゃない。お前の童貞には価値がある。他人の為の力になれる、唯一無二の純潔だ。よその子でも子供は子供。童貞のお前にも親心があつて、その子達を守るために踏ん張れる男だつて、お父さんは信じてるぞ。童貞は、誇つてもいいんだ」

父親というのは、子供の至らぬ所ばかりを挙げてものを言いがちだ。加賀徒の父も、その類である。しかし、今の彼の言葉からは、加賀徒を頼る、信頼するに足ると認める響きが確かに感じられた。加賀徒は顔を上げ、父を見上げる。

「ありがとう父さん。……一言いい？」

「おう。何だ？」

息子の言葉に答え、彼は顔を近付ける。間合いに入つたところで、

加賀徒は指を伸ばし、開いた手に力を込めた。

「童貞連呼すなー!」

生まれて初めて、加賀徒は父親の横っ面を張り倒した。

（後書き）

これはひどい。

真面目なのを期待していた方、ごめんなさい。

これは思いついた途端、どうしても書きたくなくなって書いたものです。連載にするともっと下品な方向に進みそうなので、短編としました。

自分で書いといてなんですが、下ネタは苦手です。ハーレムものとかも正直嫌いです。でもホモネタは、ギャグとしては大好物です。

読んでくださった方々、ありがとうございます。

妊婦さんは労わってあげてください。

お父さんは叩かないでください。

長くなりましたのでこの辺で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5644n/>

キヨラカ涙

2010年10月8日14時26分発行